

## 異文化体験の振り返りによる大学生の変容

根本康平(青山学院大学大学院)

### 1. 研究の背景

異文化間能力(Intercultural Communicative Competence: ICC)を育成する手段の1つとして、学習者が自身の異文化体験について振り返ることが挙げられている(Byram, 1997)。本研究では大学生がどのような異文化体験を経験してきたか明らかにすると同時に、その異文化体験について振り返ることが参加者の異文化間能力にどのような変化をもたらしたかについて発表する。

### 2. 研究目的と参加者の概要

本研究の目的は、海外において異文化体験を経験した大学生が、異文化体験について振り返った結果、どのような変容があったかを明らかにすることである。参加者 A は英語を専攻とする A 大学の大学生で、インタビュー実施当時は4年生であった。彼はアメリカ人の父と日本人の母をもち、日本で生まれた「国際児(Intercultural Children)」(鈴木, 2008; 石井, 2013)である。また、帰国生でもある。

### 3. 研究方法

本研究のデザインは事例研究であり、データ収集方法としては1回の半構造化インタビューを用いた。参加者はまず自身の異文化体験を1つ選択し、異文化体験の振り返りツールである Autobiography of Intercultural Encounters (AIE) に記述した。その後研究者がそれを読んだ上で AIE の質問項目に沿って半構造化インタビューを実施した。インタビューの時間は約1時間41分であった。インタビューは全て録音し、テープ起こしをして逐語録を作成した。分析方法として大谷(2008, 2011)の質的データ分析法 SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いた。

### 4. 結果

参加者が選択した異文化体験は自身が小学校低学年に中東の国に長期滞在生活した経験である。今回の振り返りを通して、参加者は当時の自身の行動や相手の価値観について理解を深めることができたと同時に過去に異文化を体験したことにより、相手の文化との違いを認識できるようになったと述べていた。また自身の異文化体験がきっかけで日頃からボランティアに目が向いていることに改めて気づいた。

### 5. 考察

Byram (1997) の異文化間能力では異文化に対する知識に加えて態度を重視している。その態度を育成するためには、異文化について深く思考する必要があり、そのきっかけを与えうるのが AIE のような異文化体験の振り返りツールだと考える。本研究の参加者は自らの異文化体験について振り返ることで、当時の自身や他者の行動や気持ちについて理由や背景を知ることが出来た。